【学力向上フロンティアスクール用中間報告書】

都道府県名	静岡県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	田　方　郡　函　南　町　立　函　南　中　学　校					
学　年	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数
学級数	6	7	6	1	２０	３６名
生徒数	２２１名	２４２名	２３９名	2名	７０４名	

Ⅱ　研究の概要

1　研究主題

「かかわり合いがつくる確かな学び」

2　研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

○“かかわり合い”を柱においた授業づくりー全教科
他とかかわりながら、その対象物・対象者との関係の中で自己を見つめ、新たな意味を見いだすことを「学ぶ」ことであると、とらえたため。
○補充・発展学習－全教科
必修教科の学習の基礎・基本を確実に定着するために、補充・発展学習を望んでいる生徒に応じるため。
○少人数指導－１，２，３年数学、１，２，３年英語
小学校の段階で、既に理解度に差ができてしまっている。さらに、中学校３年間の内容も個々にきめ細かに指導しないと差が出やすい教科であるため。
個々に応じて分かる指導をしていかないと、コミュニケーションする楽しさを感じることができなくなってしまうため。

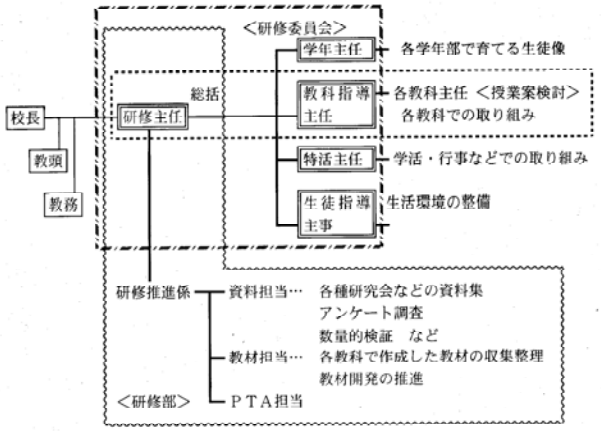
(2) 年次ごとの計画

平成14年度	○テーマ 「基礎・基本の確実な定着を図る授業」 ～指導・評価の工夫～ ○仮説 練り合う場面の中で他とかかわり合い、個の思いを大切にしながら学習を進めれば、教科への興味・関心・意欲が高まり、確かな学びに結びつくであろう。 ○研究内容・方法 ①授業での練り合う場面の設定・・・生徒同士のかかわり合い →年間指導計画の単元構成の中に、練り合う場面を必ず導入するように立案 →最低月に２回の教科研修会 少人数学習（数・英）の実施・・・教師、ｽｸｰﾙﾎﾞﾗﾝﾃｨｱと生徒とのかかわり合い

平成15年度	○テーマ 「かかわり合いがつくる確かな学び」 ～個に応じたかかわり・相互のかかわりの充実～ ○仮説 ①練り合う場面の中で他とかかわり合い、個の思いを大切にしながら学習を進めれば、教科への興味・関心・意欲が高まり、確かな学びに結びつくであろう。（14年度に同じ） ②生徒と教師がコミュニケーションを図りながら学びの評価を行い、その習熟度に応じて少人数学習を行えば、確かな学びに結びつくであろう。 ○研究内容・方法 ①各教科での練り合う場面の明確化 ②少人数学習の実施 ＜数学・英語＞・・カリキュラムの中で少人数学習の位置づけ ＜他教科＞・・・・ＴＴによる複線化授業 学力の分析方法の確立

平成16年度	○テーマ 「かかわり合いがつくる確かな学び」 ～個に応じたかかわり・相互のかかわりの充実～ ○仮説、研究内容・方法 １・２年次の研究の成果と課題をもとに、学力向上のための“かかわり合い”のあり方について研究を発展させる。

(3) 研究推進体制



昨年度から左記のように組織をつくり運営してきたが、なかなか機能しなかった。問題点としては、会議の数が多くなる。教科部会の時間がなかなかとれないなどがあげられた。そこで来年度は、指導部の「教科指導部」を研修部で取り込み、研修体制の中子どもの指導と教師の研修を進めていくよう改善をしていく予定である。また、学年研修や、教科研修の時間を定期的に組み込み（月１回）、運営してきたが、より一層の計画的な研修を進めていきたいと考えている。

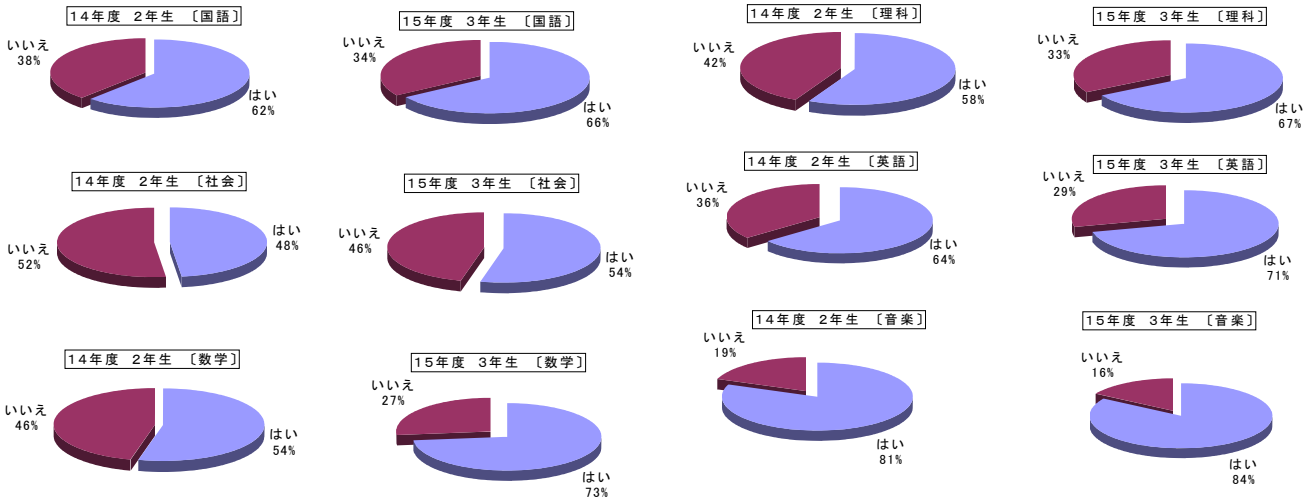
Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１　研究の成果

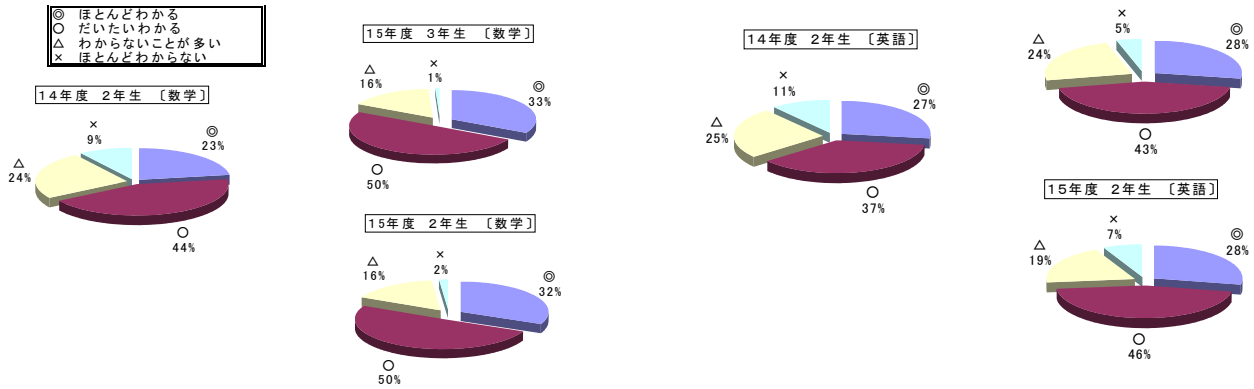
全教科で「かかわり合い」を目指した授業実践を積み重ねてきたため、子どもたちは友だちと相談したり、その結果をまとめ発表することに慣れてきた。

授業を楽しいと感じる生徒が増えてきた。（グラフ１）また、それに伴い、「分かる」と感じる生徒が増えてきた。（グラフ２）具体的には、協力して解決していくことや、その教科のおもしろさを感じ取り、おもしろいと感じる生徒が見られるようになった。（資料１）

（グラフ１）



（グラフ２）



（資料１）（数学のアンケート調査、授業の表れより）

ア　生徒のアンケート（５月、１０月実施）

Ｑ「楽しいと感じるときはどんなときですか。思いつくだけ書いてください。」

５月：平均２．４個

１０月：平均３．２個

５月実施のアンケートと、１０月実施のアンケートの比較から、楽しいと感じるときの個数が増えている。共通して多かったのは「先生の話」「問題が解けたとき」等であるが、増えた内容として

①「難しい問題が解けたとき」

②「新しいことを知ったとき」

③「友だちと問題を考えるとき」

④「問題をつくるとき」

などの意見が５月に比べて増えた主な意見である。

①については、教材の関係や発達段階における表れともとれる。②についてはその中身を詳しく分析したいところではあるが、数学の世界が広がったことと考えられるだろう。③④については、「かかわり合い」を大切にしてきた指導の継続や、柱となる手だてとしている「問題づくり」の成果であろう。

イ　授業の表れより

以下は、授業を行っていて、生徒が授業中につぶやく言葉や、追究カードなどに書かれている意見である。

①「わかっていることは何と何だろう？」

②「使える性質は何？」

③「似ているけどどんな関係？」

④「式で表すと…」

２　今後の課題

各教科における、「かかわり合い」を目指した授業を確立し、方法や成果を分かりやすくまとめ、示せるようにしていきたい。（一般化できるような研究）
組織や運営まで含めた効率の良い研修、授業計画の推進の方法の確立。
・研修を進めていく上での効率化
・教科の担う学力向上のための手だての検証
・教材開発の実践事例のまとめ
・評価と支援の方法についての検証

Ⅳ　学力把握のための学校としての取組

(1)定期的に行っているアンケート調査（年２回）
(2)各種テストの、度数分布の推移の追跡（随時）
(3)教育課程実施状況調査などと同じ調査を行い、その分析。（随時）
(1) 「かかわり合い」を目指して、楽しい授業、分かる授業から学力の向上を目指している。したがって、子どもたちはその教科の授業をどのように感じているのか、また、その教科でどのような力が身についているかをアンケートなどで継続して調査し､その様子から子どもたちの学力を分析するとともに、私たち教師の反省に生かす。
(2) テストの内容によって変化するのであるが、単元テストや定期テストの度数分布の推移を追跡していくことで、Ａ，Ｂ，Ｃの評価の子どもたちがどのように推移しているのか、また、単元によってどのような傾向になるのかを分析し、その後の評価や支援に生かす。
(3) 全国的な評価との比較のため、教育糧実施状況調査と同じ問題を意図的に出題し、結果を比較することで、その学力の程度を把握し、今後の指導に生かす。

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

各種たよりへの実践事例の掲載（「田教研だより６３号」「田教研数学部たより H15. ＮＯ１」）
中間発表会（Ｈ１５．１１．１２実施)、発表会（Ｈ１６．１１．１２実施予定）の実施
ＨＰによる研究成果の普及（来年度実施予定）

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新機構・継続校】　☐１５年度からの新規校　☑１４年度からの継続校

【学校規模】　☐３学級以下　☐４～６学級
☐７～９学級　☐１０～１２学級
☐１３～１５学級　☑１６学級以上

【指導体制】　☑少人数指導　☑Ｔ．Ｔによる指導

【研究教科】　☑国語　☑社会　☑数学　☑理科
☑外国語　☑音楽　☑美術　☑技術・家庭
☑保健体育　☐その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　☑有　☐無